

---

# 離れ行く三人

白波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

離れ行く三人

### 【Nコード】

N1885Z

### 【作者名】

白波

### 【あらすじ】

組織の壊滅後、コナンと哀はそれぞれ新一と志保に戻り生活していた。コナンと哀が抜けた後も探偵団は活躍を続け高校生になり探偵クラブとして活動していた。そんな探偵団の三人が遊園地へ遊びに行ったとき歩美は怪しい取引を目撃してした。取引を見るのに夢中になっていた歩美はもう一人の仲間気づかず薬を飲まされてしまう。その薬は解毒剤の完成後なくなったはずのAPT4869だった。オリキャラがたくさん出てきます。

## プロローグ

ここは東京駅の新幹線のホーム。このホームに元の姿に戻った新一と志保が立っていた。

「はい…じゃなくて…宮野…本当に行くのか？」

と新一が聞くと志保は

「ええ…確かに米花町あの町は暖かいし住みやすいわ…でも組織が壊滅したらかつてあきらめていた夢を追いかけたくなったのよ…私の事なら心配しないでいいわよ…いつそのこと忘れちゃっても恨まないわ…。」

と言った。

「忘れるわけねーだろ…お前は俺の大切な相棒なんだからよ！」

と新一が言うと志保はクスツと笑って。

「相変わらずね…それじゃあ…またどこかで会った時には忘れたなんて言わせないわよ…。」

と言いつつ残り新幹線に乗り込んだ。発車ベルが鳴りドアがしまる。ゆつくりと動き出す新幹線を見送った新一は家へと帰る前に毛利蘭がいるであろう探偵事務所に向かった。

新一も志保も…それだけではなくFBIの面々もこの時は組織は完全に壊滅したと信じていた。

それから10年もの月日がたちその考えが甘かったと痛感させられるのだった。

10年もの間に組織の間は深まりより多くの人を巻き込んでいくこととなるのだ…。

なぜこの時にAPT X4869がすべてなくなったのか確認しなかったのかと後悔することになる。

10年もの間運命と言う名の歯車は止まっていただけなのかもしれない。

動き出した歯車はとどまることを知らず多くの人を巻き込み加速して行く…

## プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからよろしくお願いします。

## 第1話 小つちゃくなつちゃった!

世間を震撼させた黒の組織事件から早10年。

コナンと哀が抜けた少年探偵団はその後も高校生探偵工藤新一の力を借りつつ実力をつけていった。

高校生となった彼らは高校生探偵として有名になっていった。

ここはある館。三人が殺人事件にたまたま遭遇しふたたび事件を解決した。三人が館から出ると報道の記者に囲まれる。

「今回の事件の謎はいつ解けたんですか？」

「今回の推理のポイントは？」

様々な内容の質問が次々記者から飛ぶ。

光彦と元太が自慢げに答えながら館から離れてゆくのをみると歩美はのんびりと歩き出す。

帝丹高校探偵クラブの紅一点である歩美は元太や光彦と違いあまりテレビに出たがらない。新一に言わせるとこれは歩美の親友であった灰原哀の影響らしい。歩美と哀ではテレビに出たがらない理由が大きく違うが…それはともかく歩美は明日の準備をするために家路を急いだ。

次の日…

八色列島 はっしやくしゅう 白桜島 しらくさぎ

白桜島は八色列島の玄関口ともいえる島で人口が一番多い。遊園地などの観光施設が多々ある。この島にある遊園地白桜ランドは離島にあるにもかかわらず結構人気のスポットである。少し前に解決した事件の依頼主がこの遊園地のオーナーで事件を解決したお礼に招待してくれたのだ。

歩美が光彦、元太と共に歩いていると黒い服を着た怪しい人を見つけた。

「ごめん！ちよつと行きたいところがあるから行くね！すぐに戻ってくるから！」

と言うと歩美はその男を追いかけることにした。

「……」

黙って歩美の後姿を見ている光彦に元太が

「どうしたんだよ？光彦？」

と話しかける。

「いえ……なんでもありません……。」

と言うと光彦は再度歩美の後姿を見て元太とともに歩き出した。

（なんでしよう……この感じは……まるで歩美ちゃんと二度と会えない気が……。）

などど光彦が考えているのも知らずに元太は次々と屋台で売っている食べ物を食べるのだった。

一方歩美はというと黒い服を着た男を追いかけて人目の付かないような場所に來ていた。

歩美がしばらく見ていると黒い服を着た男と別の男が何らかの取引を始めた。歩美が取引を見るのに夢中になると突然後ろから黒い服を着た長髪の男に殴られた。

「兄貴！こいつは？」

と取引をしていた男が言うのと長髪の男は

「ここそと俺たちの事をかぎまわっていたやつのような……。」  
と言った。

「やつちまいやすか？」

と言いながら男が拳銃を出すと長髪の男は

「待て……こんなところでそれをぶっ放したりするのはまずい……だからこれを使う……。」

と言いながらカプセル状の薬を出す。

「それは前の組織が解散する前にシェリーってやつが作った薬ですかい？」

と男が聞くと長髪の男は冷徹な笑みを浮かべ

「そうだ……これなら絶対わからんだろ……死体からは何も検出されないらしいし……。」

と言つとそれを歩美に飲ませた。

**第1話 小っちゃくなっちゃった！(後書き)**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第2話 出会ったのは…

歩美は目を覚ますと体に何か違和感を感じつつなるべくその場から離れようと走り出した。すると角を曲がったところで栗色の髪が印象的な女性とぶつかった。

「いてて…。」

と歩美がいとその女性は

「あなた…大丈夫？」

と話しかけた。

「うん…。」

と言いながら歩美が顔をあげるとその女性は歩美に顔の高さまでか  
がんでジーと歩美の顔を覗き込む。

「似てるわね…。」

とその女性が言つと歩美は

「えっ…誰にですか？」

と聞いた。

「そんなわけないわよね…いえ…絶対ないはずよ…。」

と言つと女性は立ち上がって行こうとするがなぜか歩美が気になるらしく再び戻ってくる。

（なんなのよ…この人…。）

と言いながら横にを向くとたまたま横にあつたガラスに自分らしき人物が写っていた。しかし、そこには女子高生ではなく小学生が映っていた。

「えっ…うそ…。」

と歩美がつぶやくと女性は

「何でそんな大きな服着てるの？だばだばじゃない…。」  
と言った。

（えーどうしよう…本当のこと言つて信じてもらつしかないのかな

?)

などと考えながら歩美があたふたしているとな性が

「間違つてたらあれなんだけど…あなた…帝丹小学校に通っていた吉田歩美さんじゃない?」

と話しかけた。

「えっなんで…」

となげこの女性が自分の事を知っているのか驚きながら歩美が言うとな性は

「やっぱりそうだったのね…薬を飲まされて体が小さくなったんじゃないの?」

と聞いた。歩美がうなずくと女性は

「だつたらついてきてくれる?」

と聞いた。歩美は少し迷つたが結果的にはその女性についていくことにした。

「ねえ…どこかで会つたことある?」

と歩美が女性に聞くとその女性

「…灰原哀…そう名乗ればわかる?」

と言つた。

「えっ!哀ちゃんなの?」

と歩美が言つと志保は

「ええ…でもそれはあくまであなた達の前で名乗つた偽名で本名は宮野志保よ…。」

と言つた。

「でも…どうして偽名なんて…」

「ここで説明すると長いし面倒なことになるから私の家で説明するわ…。」

と言つと志保は歩美と共に遊園地の外へ出ていく。

歩美が志保についてしばらく歩いていくと大きな屋敷に着いた。

「ここが私の家よ…。」

と言つと門を開けて中に入つて行く。

「すごい……。」

と歩美がつぶやくと志保は

「工藤君の両親に譲つてもらつたのよ……私はいいつて断つただけど……。」

と言いながら奥へ入る。歩美は興味津々であたりを見ている。これほどの屋敷を譲つた工藤と言つ人物は何者なのかと気になって来るぐらいである。

「この部屋よ……。」

と言つと志保は歩美をある部屋に通した。

第2話 出会ったのは…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1885z/>

---

離れ行く三人

2011年12月11日13時52分発行